

齋藤幸平氏の『人新世の「資本論」』は、経済問題に疎い私には難しい本であったが、世界が危機を知らされている今、強い刺激を受け、新しい時代への展望に希望を見るような思いになった。「人新世」とは、人類の経済活動が地球に与えるインパクトが無視できないほど大きく、もはや地球は新たな地質年代に突入した時代であると、ノーベル化学賞を受賞したパウル・クルツェンが名付けた言葉である。その「人新世」における経済について、物の見方を根底から覆す論考を提示している。

米国を中心とした自由主義とソ連を中心にした共産主義に、世界は二分されていた。ソ連の崩壊によって、自由主義が勝利し、その体制を支える資本主義が人類に豊かさを生み出すと認識した。資本主義は「外部」を作り出し、そこから収奪することによって成り立つ。ところが今や、グローバル資本主義にまでに至った。ファスト・ファッションの洋服を作っているのは、劣悪な条件で働くバングラデシュの労働者たちであり、原料の綿花を栽培しているのはインドの貧しい農民たちである。先進国の「ヘルシーな食生活」のために、チリでは輸出用のアボカドを栽培してきた。アボカドの栽培は多量の水を必要とし、土壌の養分を吸い尽くすため、一度アボカドを生産した土地では、他の農産物の栽培が困難になり、チリでは大干ばつが襲った。豊かさと美しさと利便性を享受するために、外部は疲弊の一途に向かっている。1%の富裕層を支えるために機能しているグローバル資本主義は、貧富の格差をひらけ続け、自然を破壊し続け、混沌とした状況を呈している。森林破壊や資源採掘などで、地球環境に深刻な影響を与え、地表はコンクリートと廃棄物で覆われ、海洋ではマイクロ・プラスチックが大量に浮遊している。中でも、温暖化をもたらす大気中の二酸化炭素の増大は深刻である。産業革命以前の二酸化炭素濃度は、280ppmだったが、2016年には400ppmを超え、南極やグリーンランドの氷床は融解し、海面は6～20mも高くなり、東京の水没も架空ではなくなりつつある。

資本主義は無限の価値増殖を目指す経済活動であるが、有限な地球の「外部」を食い尽くしていけば、二度と元へ戻れない地点、ポイント・オブ・ノーリターンを超えて行く。これは、誰もが抱いている危機認識ではないか。

齋藤氏は、この危機からの脱却をカール・マルクスの思想から説き起こしている。それは、隠されていたマルクスの「脱成長コミュニズム」であると言う。脱成長コミュニズムは、「農村に帰れ」とか「コミュニンを作れ」とか、「清貧の思想」などではない。五つの柱を持っている。①「使用価値経済への転換」②「労働時間の短縮」③「画一的な分業の廃止」④「生産過程の民主化」⑤「エッセンシャル・ワークの重視」の五つである。なるほどと首肯できる。私は特に「エッセンシャル・ワークの重視」に関心を持つ。人間が生きるに必要な基本的な労働が重視されるべきであると思うからである。齋藤氏の論述と私の聖書から学んだ視点を混在させて、感想を述べると、大きいこと、強いこと、豊かであるだけを求めることから、人間の命を支えることを至上の価値とする経済政策への転換が急務であると思う。また齋藤氏は、既に各国で「脱成長コミュニズム」の種とも呼べるような革新的な試みが行われていると紹介している。そして、3.5%の人々が相互扶助のネットワークを本気で立ち上げるならば、世界は大きく変わると述べている。

「本書を読んだあなたが、3.5%のひとりとして加わる決断をするかどうかにかかっている」と締めくくっている。